

- 草勢が強いことから燃油使用量が削減可能で、炭疽病抵抗性を持つ「かおり野」について、平成24～25年に実証ほを設置し、栽培技術確立を図ってきたが、さらなる育苗の省力化や2月以降の収量安定化等が課題となっている。
- このため、現地実証ほ等から得られた情報により栽培マニュアルを作成し、栽培技術の定着や食味の安定化を図る。
- 経営指標を作成し、新規栽培者や法人経営への導入を推進する。

具体的な成果

1. 「かおり野」栽培マニュアル等の作成
 - 草勢管理による品質安定化を重視した「かおり野」栽培マニュアルを作成。
 - 出荷規格表を作成し、生産者間の品質のバラツキを改善。



2. 「かおり野」の普及拡大・品質向上
 - 栽培面積
H25:3.2ha、H26 :5.3ha、H27:7.8ha
→ H28:9.9ha
 - 糖度 8度以上

3. 認知度向上
 - 試食宣伝など消費拡大を展開して、認知度が向上。



普及指導員の活動

平成24～25年度

- 県内10カ所に栽培実証ほを設置。
- 各実証ほでは、普及指導員が調査研究テーマを設けて、以下の課題を解決する。
 - ① 育苗省力化技術
 - ② 施肥改善技術(食味安定化)
 - ③ 炭酸ガス施用技術 等

平成26～28年度

- 農業革新支援専門員が中心となり、栽培のポイントとなる時期に、県域ほ場巡回や検討会を開催する。
- 経営指標を作成し、市町や県農業大学校等と連携して、新規栽培者や法人等へ作付推進する。
- 関係機関と連携し、販売促進活動の支援や、加工品開発等を行う。

普及指導員だからできたこと

- ・山口いちご産地振興プロジェクト(全農山口県本部、各JA、県関係機関で構成)の一員として、栽培マニュアルの作成などにかかわり、また、関係機関と一体となって、農家への指導などが展開できた。

山口県

新品種「かおり野」の栽培技術確立と産地振興

活動期間：平成24～28年度

1. 取組の背景

山口県におけるイチゴは、単価の低迷や生産コストの上昇、病害発生による収益性の低下等により栽培面積は減少していた。このような状況を改善するため、草勢が強く燃油使用量が削減可能で、炭疽病抵抗性を有する「かおり野」の栽培技術を確立し、新規栽培者等への導入を推進した。

2. 活動内容（詳細）

(1) 平成24～25年

県内10か所で栽培実証ほを設置し、普及指導員が3つの研究テーマ(①育苗の省力化技術②食味安定化に向けた施肥改善技術③炭酸ガス施用技術)を設定し、課題解決に取り組んだ。



現地検討会

(2) 平成26年～平成28年

農業革新支援専門員が中心となり、栽培のポイントとなる時期に、県域のほ場を巡回指導し、併せて、検討会を開催した。

また、収集したデータから県域の統一経営指標を作成し、市町や県立農業大学校等と連携して、新規栽培者や法人等への作付を推進した。

さらに、全農山口県本部等、関係機関と連携して、試食宣伝活動の支援や加工品開発等に取り組んだ。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 「かおり野」栽培マニュアル等の作成

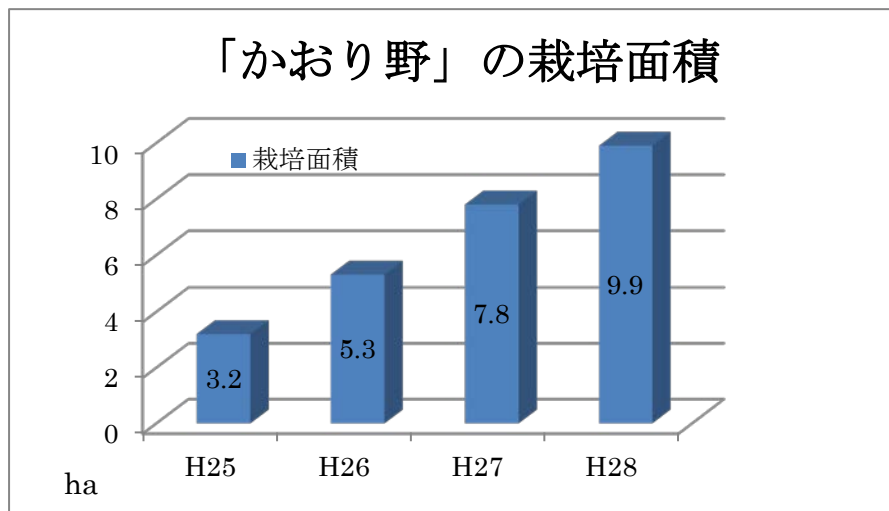
年間作業管理帳としても活用できる「かおり野」栽培マニュアルを作成した(500部作成)。また、出荷規格表を作成し、生産者間の品質のバラツキを改善した。



「かおり野」栽培マニュアル



- (2) 「かおり野」の普及拡大・品質向上
 新規栽培者等への作付推進により、「かおり野」の栽培面積が拡大した。また、糖度は出荷期間を通じて、8度以上を維持できた。



- (3) 認知度向上
 農業団体等と連携して、試食宣伝活動による消費拡大の取組を展開し、認知度が向上した。



試食宣伝活動

4. 農家等からの評価・コメント（下関市 I 氏（イチゴ生産者））

「かおり野」の導入当初から、生産者に対するサポート体制を県域・地域に構築し、関係者が一丸となり、課題解決に向けた取り組みを迅速に展開されており、高く評価している。

とりわけ、各地の実証ほ等で得られた知見を基に作成された栽培マニュアルは、「かおり野」を栽培する上で非常に参考となっている。また、認知度向上に向けた消費・宣伝対策を通じて、いちご生産者が品種更新する際の流通面の不安解消が進んだと思う。

自分自身の経営においては、「かおり野」の導入により、課題であった「炭そ病」のリスク軽減効果や、今後の規模拡大を念頭に置き参画した育苗省力化技術の現地実証試験等から省力効果も実感でき、今後の経営展開において、「かおり野」は必要不可欠な品種と考えている。

最後に、私の所属する生産部会でも、生産者の高齢化が進展しているが、

「かおり野」を導入した農家では、品種更新を契機に、導入以前よりも営農意欲が向上したように感じている。また、意欲的な新規就農者を生産部会として受け入れ、関係者が一体となりサポートする新しい試みにも挑戦しており、「かおり野」の導入推進に係る取組は、産地の活性化にも寄与したものと考ええる。

5. 普及指導員のコメント(下関農林事務所農業部 主査 中村誠司)

「かおり野」の導入を、地域の取り組みと歩調を合わせ推進しており、現在、管内いちご産地では、栽培面積の過半を「かおり野」が占める等、平成24年度の栽培実証栽培以降、「かおり野」の導入面積が急速に拡大している。

「かおり野」の導入推進にあたっては、技術面では、講習会等を通じ、従来品種との特性の違い等を、県域共通の栽培マニュアル等を用いて丁寧に説明を行ってきた他、導入農家に対しては、県域・地域における定期的な巡回指導や講習会等を通じ、各地の実証ほ等で得られた新たな知見や、時期に応じた栽培管理情報等を適宜周知・徹底し、栽培技術・営農意欲の向上を図ってきている。また、流通面では、関係者が一体となった消費・宣伝対策を通じて、いちご農家における品種更新への不安解消はもとより、広く取組への理解促進を図ることができたと考えている。

さらに、「かおり野」の導入を契機に、一部地域では、地域に参入する新規就農者の「かおり野」の生産技術習得を生産部会が一体となり支援する取組が試行される等、「かおり野」の導入推進に係る取組は、産地活性化に向けた新たな取り組みへ着実に繋がっていると考えている。

6. 現状・今後の展開等

農業団体が主催する「山口いちご産地振興プロジェクト」の一員として、関係機関と連携し、県域での栽培技術指導に取り組むことで、生産拡大や担い手育成を支援している。

また、試験研究機関とも連携し、新たな知見等は栽培マニュアルに反映するなど、更なる山口イチゴの生産振興を図ることとしている。